◆優　良　賞◆

塾に行きたい

旭陵中学校　三年
斯波　佳奈美

「今日も塾かぁ。めんどうくさいな。」こんな言葉が耳に入ってくるたびに、自分の心の中に、少し重いものを感じるときがある。

子どもの頃から私は二人の兄と同じ習い事をしていた。応援してくれる両親と、家族みんなでその習い事に懸命だった。のびのびとさせてもらったおかげで、私も兄二人も注目される側の人間になるほど成長できた。お金に関しては、私はそれほど考えたことはなかった。

中学生になっても習い事への熱は冷めていなかったが、勉強も好きだった私は、もっと勉強をしたいと思い、両親に「塾に行きたい。」と話した。賛成してくれると思ったが、両親の顔は曇った。父から「お父さんの稼ぎだけでは難しい。」と言われ、私は予想しない展開にショックを受けた。しかし、「塾に行きたいのに、通わせてあげられなくてごめんね。」と言う母の表情を見て、とっさに動揺を隠した。その頃、母が突然体の調子を悪くして、仕事を辞めてしまっていたのだ。「今までどおりするから大丈夫。」と明るく言ったが、母はそれからも時々私に同じことを言った。

私は成績を落とさないよう、習い事も勉強も、それまで以上に打ち込んだ。そんな私を見て、父が、三年生になる春休みに、ある塾の春期講習に申し込んでくれた。その二週間、私は熱心に勉強した。きっと父がやりくりしてくれただろう春期講習の費用を無駄にはしたくなかった。学校の課題以外に、一・二年生の復習とその応用問題。模試。やることが次々に出てくる。私服の友達と休憩の時間に話すのも楽しかったし、家で塾の宿題をしているときに友達とラインで励まし合うのもよかった。とても充実した春休みだった。春休みが終わっても、このまま入塾したいと思ったが、習い事と時間が被っていることと、あまりの値段の高さに驚き、やめてしまった。

しかし、私は、塾に行けないという現状に負けたくない。方法はいくらでもある。わからないところがあれば、すかさず先生に質問したり、それが得意な友達に教えてもらったりするのだ。

これは、習い事をやめれば塾に行けるではないか、という単純なことではないと思う。

インターネットで調べたところ、子ども本人に変えることができない「生まれ」と結果によって違いがあることを教育格差と呼ぶという。その「生まれ」の一つに世帯収入がある。現在、全国の中学生の七十％が塾に通っているというデータがあるが、私のように通っていない三十％に入る人はどうすればいいのだろうか。例えば、放課後の学校の教室を活用し、市が運営する、無料のサポート塾のようなものがあれば、三十％の私のような人は助かるのではないだろうか。学びたい気持ちが受け入れられる、そんな社会であってほしい。